

提言

「地域共生学習塾」の試み

県立長崎シーボルト大学 松永恵子

平成11年度、栄養健康学科で「生涯スポーツ論」を担当することになった。最初に取り組んだことは、地域住民の健康や運動・スポーツに関する意識を調査し、その中から問題点を探ることであった。長与町12,176世帯のうち4,326人の方から回答をいただいた。その結果、1年間何も運動しなかった人は42.3%であり、50歳以上(2,192人)のその理由は、「年をとった」、「体が弱い」、「機会が無かった」、「他の趣味活動が楽しい」、「運動・スポーツは好きでない」、「仕事が忙しい」などであった。また、運動に関しては実施する人と実施しない人の二極化が進んでいた。

「自分の健康は自分で守る」という生活習慣病の一次予防として、運動、栄養、休養のバランスが大切ではあるが、特に高齢者では痴呆や寝たきりになる原因の一つに骨粗鬆症や骨折が挙げられる。このような理由から、常々転倒予防教室の地元での開講を希望していたが実現していなかった。その様な折りの平成14年8月、学長より「大学が21世紀を生き抜くためには、地域の住民と学生、教職員が一体となって活動し、その地域と大学を活性化する事が大切であり、転倒予防教室を開講してはどうか」とのお誘いがあった。

私にとっては願ったり叶ったりで、すぐに会員募集に着手、10月から12月まで地域共生学習塾「転倒予防教室」を開講した。50歳代から70歳代の男女41人と大学の体育館で毎週金曜日午前中2時間の運動を楽しんだ。住民の方々は、若い学生とともにフォークダンスやボール運動ができることを楽しみに毎回参加した。

転倒予防教室は運動経験のない人への体を動かす楽しさの経験と転倒の予防を目的に開講した。参加した人達の大半は現在も町内の運動クラブに所属しており、75歳で登山部や剣道部に所属し「次は栃木県に剣道の試合に行くので休みます」と話していた。

平成15年4月に公立大学協会が発表した「これからの公立大学」によれば、公立大学の設置理念として、共通するのは地域社会への貢献であり、そこに要求されるのは、地域の特性・要求を反映した活動目標を掲げ、時代のニーズを反映させながらそれを随時更新していく小回りの利く管理運営であろう。…地域社会が

求める地場の課題(高齢化社会・少子化社会とリカレント教育等)のローカル性は同時に人類社会が共通に直面する、あるいは近未来に遭遇するであろうグローバルな課題を先取りするパイオニアとしての側面を持つ。…公立大学は、教育の場としての地域貢献も重要な使命で、ローカル性とグローバル性が高度に調和した教育と研究とを同時に追求する姿勢が、公立大学の今後の発展を導くものであると考える。…その存在そのものが地域貢献の為にあり、地域社会の活性化の為にあるという自覚が教員・職員の中に必要であると述べている。

グローバルな産・官・学の共同研究ではないが、地道な草の根運動も大切ではないかと自問しながら、平成15年度には5月から7月に50歳から60歳代の女性を対象に、転倒予防教室を開講し、健康支援グループの名のもと自主サークルを結成した。この健康支援グループが地域の基本健康診査と同様に、高齢者の体力測定への協力などにより、健康寿命の延命に役立ち、医療費節減に貢献できればと一人夢見ている。

さて、長崎県は平成15年5月に「県立大学改革基本方針」を打ち出した。平成17年4月には法人化、平成20年には県立長崎シーボルト大学と長崎県立大学との統合を計画している。その改革の方向性に「社会貢献」を掲げ、産学官民の連携による地域ニーズに即した教育研究の促進、研究成果の積極的な公表による地域振興への活用促進、専門的な知識や技術に関する体系的な社会人再教育などを挙げている。

また、全国に先駆けて、教員人事を活性化し教育研究レベルの向上を図るため、法人化と同時に全教員の雇用形態に任期制を導入するとしている。すでに平成15年から研究費は競争原理に基づいた配分となり、教育・研究に切磋琢磨しなければならない競争時代を迎えている。このことは、一地方大学に限らず、国立大学や私立大学も同様であろう。

保健体育教師一人一人が、今自分にできることは何か、地域と大学の接点は何か、学生と教師が共にできることは何かなど、創造的な視点が研究と教育の融合化に繋がると考える。

コミュニケーション・ワークの体育科目への応用について

— コミュニケーションはキャッチボール —

特定非営利活動法人 福岡県レクリエーション協会専務理事
レクリエーション・コーディネーター

佐藤 靖典

私は講演や大学の講義などで話をする機会が多いのですが、最初に参加者が身構えている状態があまり好きではありません。そこで、今回もレクリエーションの手法にもあるアイスブレイキングの体験から始めました。まずは、あいさつの交換からはじまり、3人組を組んで、「おはようございます」や「でていけ」の掛け声とともにグループを再編成したり、ゲー・チョキ・パーごとに急いで集まったり、様々なゲームに参加してもらいました。最後は身も心もあたたまった感じになり、まさに人間関係やその場の雰囲気を和ませる体験をしてもらいました。

今回参加の先生方は大学生よりも一生懸命で、とてもスムーズに進行できました。しかし、私はある大学の集中講義でレクリエーション実習を指導した時に、当初学生が全く反応を示さずとても困惑した経験があります。なかなか積極的に参加してくれないので、正直な学生の気持ちを確認してみると、本当にレクリエーションを勉強したい学生は少なく、その時点では単位のために受講している学生が多いことに気がつきました。そこでは、学生の目的（単位の取得）と参加者に対して持っていた指導者（私）のイメージ（専門教育への意欲など）が異なっていたのです。それに気がついてからは、独り芝居ではなく、いかに学生とコミュニケーションをとるか、いかに楽しませるかということを重視して取り組みました。また一方で、遅刻は絶対許さない、できなかつたら単位を出さないなど、指導者が真剣に授業に取り組んでいることも宣言しました。その結果、「この私が集中講義の授業中、一睡もしませんでした」という学生自身の驚きの声や、「今まで生きてきて、あんなに沢山の拍手をもらった経験がありません」など喜びの感想が出てきました。

レクリエーションだけでなく、コミュニケーション・ワークでもそうですが、ゲームの中身が面白いから対象者が動くのではなく、対象者の心を動かすことが大切なのです。受け手の反応が悪い場合などは、受け手から帰ってきている反応そのものが、送り手がし

ているコミュニケーションであり、このことに配慮して対応していくということが、コミュニケーション・ワークの原点なのです。

上海に旅行に行ったときに、「交通銀行」という看板をみかけました。英語では「Bank of Communication」と記してありました。そこで私は、あっ・そうか「コミュニケーションとは通いあうこと」なのだと再確認できました。良いコミュニケーションをするには、送り手と、受け手の双方が気をつけないとうまくいきません。コミュニケーションは、ドッチボールではなく、キャッチボールなのです。参加された皆さんにこのことを理解していただくために、お手玉を使ってキャッチボールをしていただきました。片手で投げたり、両手同時に投げたり、受け手が手を動かさなかったり、目をつぶって投げたりと、いろいろとお互いのコミュニケーションを確認しながらキャッチボールをしてみました。一度に沢山投げると受け取れないし、相手が反応しないと難しい。相手が受け取りやすいように投げる。さらには、受け手が受け止めようとするような心をつくるのが大切なのです。大学の授業でも学生に対して、なんで受け止めないのかと憤慨するよりも、相手が受け止めようとする心をつくってあげることがまず必要だと思います。私



は区役所に管理職で勤務していたときに、着任当初それまでの職場風土が、部下がなかなか挨拶もしてくれなかったことがあるのですが、とにかく職員の名前を一生懸命覚えて私の方から積極的に挨拶をするように様々な工夫をしました。また、留守中に私の決裁をもらいにきた職員の部署に印鑑を持って「印鑑ありませんか」とまわったりしました。その結果、職員の態度は見違えるように変わっていききました。コミュニケーションを取ろうとする相手に対して「関心を持っていますよ」というメッセージを積極的に送ること。そのことが受け手に変わってもらう大きな工夫になります。

コミュニケーションがうまくできるようになるための工夫の繰り返しトレーニングです。日本への留学生の中で一番世話が焼けるのは中国からの留学生という話を聞きました。中国では一人っ子政策で、家族の中での葛藤が非常に少なくなっており、コミュニケーションが苦手な子どもがとでも増えているようです。コミュニケーションがうまくできるようになるには、やはりくりかえしトレーニングが必要なのです。

レクリエーションの指導者が心がけていることに、

ホスピタリティ・マインドというのがあります。これは、「お節介」と「親切」の違いを理解して、相手に接するという事です。お節介とは、でしゃばってあれこれと余計な世話をやくことで、相手の気持ちよりも自分の気持ちが優先しています。親切とは、自分がしてあげたいという気持ちが優先するのではなく、相手がして欲しいと思うことにぴったり合わせることで、そうすることで、感謝の念が湧いてくる。このことが、良いコミュニケーションや良いサポートにつながっていくのではないかと思います。なんでお前はわからんとや?というのは、まさにお節介になってしまいます。

本当に良いコミュニケーションは対等な人間関係からしか生まれません。最近の若者に対応していくのは大変なことかもしれませんが、腹は立つけど諦めないで。コミュニケーションはキャッチボールです。I'm OK, You're OKからはじめましょう!

(記録 角南良幸)



「魅力ある授業づくり」とその〈知〉のリアリティをめぐる

宮崎大学教育文化学部 根 上 優

I. はじめに

平成12年度のシンポジウムに於いて、演者は「魅力ある授業づくりのための予備的考察」と題して次のような問題を提起した。

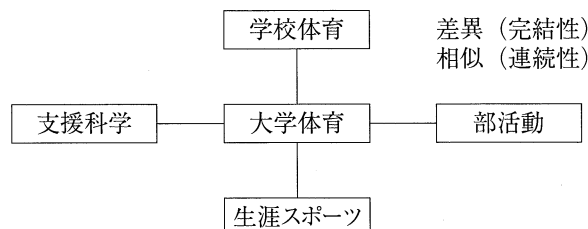
- ① 大学における体育が「科学的根拠を問われた時代」から「存在そのものを問われる時代」にあること。
- ② 「魅力ある授業づくり」というときの体育授業の「魅力」とは、体育の「価値」と同義であり、したがって、われわれの掲げる「教育と研究の融合化」という課題の意味するものは、「価値ある授業の創出」であること。
- ③ われわれ体育連合が教育・研究の組織として取り組むべき課題は、そのように大学体育の存立そのものが問われている時代の中で、「魅力ある体育授業」すなわち「価値ある体育授業」を創出するために「体育の魅力」すなわち「体育の価値」を科学的・哲学的に問うこと。

その後2年間に、当該会議のシンポジウムや一般研究発表、さらには機関誌『体育・スポーツ教育研究』を通じて多くの貴重な研究および実践報告が蓄積されてきた。今回は、これらの研究・実践報告を念頭に置きながら、主としてリアリティの構成という観点から「魅力ある授業づくり」に向けての「方法的スタンス」について問題提起を試みたい。

そのためにも一旦、「魅力」という問題から離れて、われわれのスポーツ・運動の経験そのものに立ち返ってからリアリティ感のある授業の構築について考えてみるべきであろう。具体的には、スポーツ・運動の持続という観点から果たして、「健康」がその目的となりうるかの検討が必要であろう。

II. 「魅力ある授業づくり」のための準拠枠

「魅力ある授業づくり」に当たって考慮すべき4つの準拠枠—「学校体育」「運動部活動」「支援科学」「生涯スポーツ」—があり、われわれは、これらの枠組みに経験的に準拠して教材を構成してきたものと考えられる。



われわれは、授業の教材を構成するに当たって準拠する領域のリアリティー固有性、課題、限界、等々を顧慮することなく、「今」という時代に相応しい授業を構成することはできない。仮に「これはおもしろい授業だ」と思って実践しても、体育の存在そのものが問われている時代にあつては、直ちに、われわれの努力を無化するような「言説」を投げつけてきたり、あるいは体育への関心をまったく示さない学生に直面したりする可能性がある。

ex.

「学校体育」との関連：「楽しい体育」と「選択制」によって飼い慣らされた学生の「体育観」、M字型の体力、高校であまり経験しない教材（ゴルフ・テニス・バトミントン）、等々

「部活動」との関連：「部活への参加を体育の単位として認めよ」という言説、部活動への参加意欲および参加率の低下、等々

「生涯スポーツ」との関連：生涯スポーツが「高齢者」と「主婦」の社会層によって担われている社会的現実、受け皿となる地域のスポーツの配分構造の変化（近代スポーツの衰退とニュー・スポーツの台頭）、等々

「支援科学」との関連：一人の教師が依って立つ学問分野・専門種目の限界、認識と方法の違い（哲学／科学、分析／記述）、等々

これらは体育の授業づくりを拘束する社会的現実の

諸問題の一部であり、われわれは、これらの問題との関連で教材を工夫し、教育行為のレリバンスとしなければならない。スポーツ・キャリア、体力、体育観、スポーツ観、等々において、どれほど体育・スポーツへの指向性を持つ学生が受講しているのか、また仮に体育・スポーツへの社会化に成功したとしても、彼らが卒業後、どのような社会的現実には包絡され、また、地域の制限されたスポーツの配分構造の中で、どのようなスポーツ的ライフ・スタイルを形成することができるのか、等々。リアリティの構成という観点から、われわれが「魅力ある授業づくり」において考えるべき教育・研究課題は実に多い。その意味で、これまでの学校教育の限界を踏まえた上で、体育の授業において「何を教えるか」ではなく、スポーツ文化が歴史的に構築されてきたことの意味を「考えさせる授業」を謳った鈴木理の論文や、学生に自らの健康状態を科学的に把握させ、生活習慣病への理解を深めさせることを通じて、健康なスポーツ的ライフスタイルの形成への動機付けを図ろうとする松永恵子と上田毅の論文は、きわめて貴重である。こうした実験的授業がスポーツ・運動への主体的実践を導く「驚きの体験」（＝「魅力」）となることは疑いない。

Ⅲ. スポーツをめぐる「健康」言説への懐疑

1. 拮抗する「科学知」と「身体知」の問題化

「生涯にわたって心身ともに健康で豊かな生活を送るため、スポーツに関する科学的理論に裏付けられた運動実践を行えるようにする」という保健体育審議会の答申（平成9年）に代表されるように、スポーツ・運動をめぐる「健康」言説は、健康・スポーツ科学の専門家の言説（「専門家言説」）として権威化されているだけでなく、広くメディアの言説（「メディア言説」）としても社会化され、またスポーツ愛好者の間でも「ありふれた経験」「ありふれた実践」として日常的に語られている（「素人言説」）。これらの言説が相互にネットワークを形成することによって、スポーツ・運動をめぐる現代の支配的な「健康文化」が構築されているのである。

今日、スポーツ・運動の実践は最早、「健康な身体」「健康な生活」を獲得するための疑う余地のない価値・規範となっている。「健康日本21」は、そうした価値・規範を具体的な目標として示したものである。

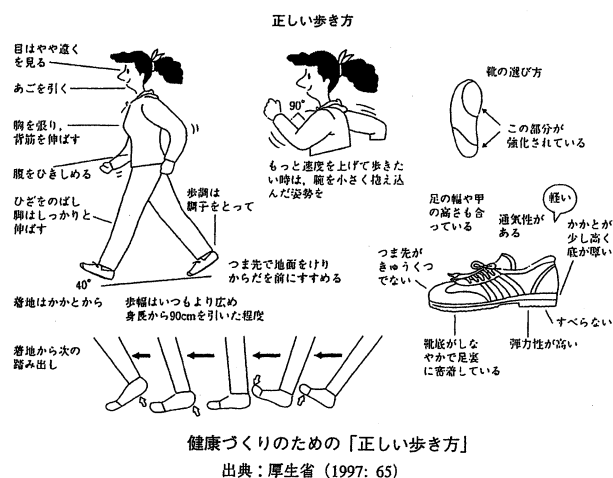
21世紀の我が国を、すべての国民が健やかで心豊かに生活できる活力ある社会とするため、壮年期死

亡の減少、健康寿命の延伸及び生活の質の向上を実現することを目的とする。（「21世紀における国民健康づくり（健康日本21）」2000）

健康を実現することは、元来、個人の健康観に基づき、一人一人が主体的に取り組む課題であるが、個人による健康の実現には、こうした個人の力と併せて、社会全体としても、個人の主体的な健康づくりを支援していくことが不可欠である。（健康日本21）

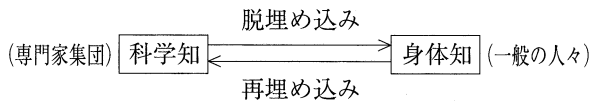
「健康日本21」の言説は、運動・栄養・休養の生活習慣の改善のための指標を細部にわたって数値化—例えば、BMI=22を維持するための「歩行」、1日当たりの歩数を女性は（1997年の国民栄養調査による）7,282歩を2010年には9,200歩に、男性は8,202歩を2010年には9,200歩以上に—し、人々に「いかに生きるべきか」（「自分の健康は自分で守れ」と問いかけ、「健康な生活」の実践を促している。生活習慣病はまさに、そうした「健康な生活」を脅かすリスクであり、ここにリスク要因としての生活習慣病を回避する（第一次的予防）ために健康・スポーツ科学の「専門家集団」—大学の体育教師、健康運動指導士（1998）、健康運動実践指導者（1989）、等々の知識と役割が拡張する所以がある。

そのようにして健康・スポーツ科学の「専門家集団」は、大学の体育のみならず様々なアクセス・ポイントで開催される生活習慣病予防のための教室で、次のような「健康づくりのための正しい歩行（ウォーキング）」（厚生白書1997）の指導者となる。



柄本三代子は、このような専門家集団のウォーキングに関する「科学的知」が「正しい知識」として一般の人々の「身体知」としてハビトス化され、拡

張される過程を「脱埋め込み」(disembedding)と「再埋め込み」(reembedding)の拮抗するそれとして捉え、そこに「ありふれた実践の政治性」が発生することを次のように構造化した。



脱埋め込み：「すでに行っていた日常的歩行を意識的に科学的ウォーキングにしてみましょう」

再埋め込み：「非日常的かつ科学的ウォーキングを、日常的歩行として生活の中に取り入れましょう」

専門家集団は、この正しい歩き方を「ミニマム」として、人々の日常生活に取り入れやすく、また「高齢者も含めた万人向け」のものへと改変し、ハビトス化しようとする。しかし、人々は必ずしも、このような専門家集団の「科学知」を「権威」として「白紙委任」(A. ギデンス『近代とはいかなる時代か?』1993)し、丸ごと埋め込むわけではなく、むしろ、すでに埋め込まれているハビトス(「身体知」)に馴染むようにして再埋め込み化を図る「強かさ」をも備えている。われわれ専門家集団は、こうした一般の人々の問題化しない「ありふれた実践の政治性」すなわち「知の拮抗」を問題化することによって初めて、彼らの「身体知」へと行き着くことができるのである。(「身体知へ回帰する専門家システム」2002)

2. 「健康のためのスポーツ」から「スポーツのための健康」へ

1996年12月、公衆衛生審議会において、1950年代から使われていた「成人病」(二次予防としての早期発見・早期治療を啓発する概念)に換わって「生活習慣病」(一次予防として健康を増進して病気を予防すること)という概念が「行政用語」として使われるようになった。「生活習慣病」という病気は存在しないが、この「病気」に含められた疾患群は、現代の超高齢化社会において医療費のコストを最も高騰させているものである。その意味で、「医療費のコストを下げる」という「健康日本21」の狙いは明確である。

柄本は、その著『健康の語られ方』(2002)において健康を増進して生活習慣病を一次的に予防する

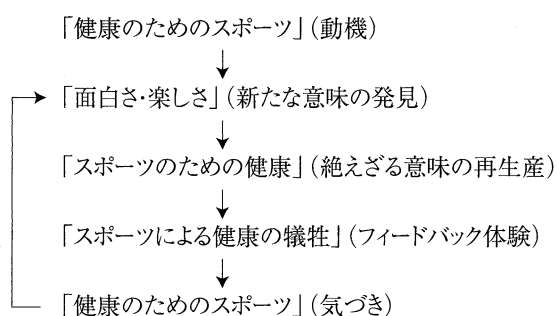
という「健康日本21」の思想を「ネオ公衆衛生学」のそれとして定義しているが、今日、このような思想はスポーツ・運動を含むあらゆる「健康文化」を貫くものとなっている。そこで「モデル」となっている理想的人間像は、自己の生活習慣を「正しいもの」「健康なもの」へと自律的にコントロールできる人間、すなわち「自律的人間」である。「正しい食生活習慣」「十分な睡眠と休養」「正しい歩き方」を身につけた人間こそ、「自律的人間」の理想的・典型的モデルなのである。

こうした人間像は、「スポーツ振興基本計画」(2000.9)に見られるように、1990年代後半から急速に「スポーツ文化」を貫く思想となってきた。「総合型地域スポーツクラブ」の育成を大きく目標に掲げた「基本計画」の理念を享けて、多くのスポーツ社会学者や経営学者が「受益者負担の原則」に基づいて、日本のスポーツ構造を「行政主導から住民主導へ」と転換することを主張しているときにも、そこに「自律した人間」を理想的な地域スポーツの担い手として掲げているのを見てとることができる。(日本体育スポーツ経営学会オープンセミナー2002 in FUKUOKA『21世紀型生涯スポーツの豊かな発展を目指して—総合型地域スポーツクラブの創造—』2002)

しかし、現代のスポーツをめぐる「健康」言説とそれを支える「ロジック」は、ライフコースの観点から見たとき、次の3点において再考さるべきであろう。まず第1に、スポーツ活動の「持続」—「生涯にわたって心身の健康を維持するためにスポーツを行う」という生涯スポーツの理念—において、「健康」は、その目的とはなりえないということだ。

現代社会においてスポーツが「身体の健康」と「健康な生活」の獲得のために最早、疑う余地のない価値・規範であることは確かである。しかし、地域における人々のスポーツ活動のサイクルを個別に観察したとき、健康がスポーツを推進する局面は、きわめて限られていることが分かる。健康のためにスポーツを始める人は数限りなく多いが、一方で、あたかも「埃をかぶったピアノ」のように短い人で数日間、長い人でも数ヶ月間で止めてしまう人の方が、むしろ長く継続する人より遙かに多いのである。こうした事態は、スポーツを続ける過程で、そこに「上達することの面白さ」や「友人と会話することの楽しさ」といった新たな発達課題(「意味」)を発見し、やがて「スポーツを続けるために健康になる

う」という「目的と手段の逆転」に失敗したことに原因がある。スポーツを生涯にわたって持続するには、このように「健康」言説から「スポーツ」言説へと離脱し、絶えざる意味の再生産に成功しなければならない。であるが故に、そこに「スポーツのために健康を犠牲にする」両義的事態も生じるのであるが。



第2に、「世代」の観点から見ると、「健康」がスポーツの動機となるのは、中高年期の人々に限られ、若者世代が「健康」をスポーツを始める動機とすることは、どちらかといえば希であることを指摘しておかねばならない。むしろ若者世代は、ダイエットや痩身術などとしてスポーツを始める傾向があり、結局のところ「健康」と同様、「世代」に固有の発達課題の解決が困難なこと—例えば、職場における地位が低く、自分の時間を自由に扱うことができないこと—と相俟って、新たな意味を発見し、再生産することなく止めてしまうのである。ここに我が国の生涯スポーツが、人生における発達課題の解決をほとんど終えた「高齢者世代」—例えば、ミニ・バレーの練習や試合のある日は仕事や家事を早く片づけるなどする人が多い—によって主として担われている現実がある。

今日、「受益者負担の原則」に基づく「行政主導から住民主導」への転換は、スポーツを「ライフ・スタイル」の重要な一要素として組み込み、「スポーツ的ライフ・スタイル」を形成している人々の間では既に、自明の事実である。にもかかわらず、なぜ、ことさら「行政主導から住民主導」への転換が叫ばれるのだろうか。ここには、第3の問題としてスポーツ人口を「スポーツ的なライフ・スタイルを形成しているか否か」の観点から質的・現実的に捉える立場と、「週当たり1回以上」の活動人口を「ヨーロッパ並み」に近づけることを目標に量的・理念的に計測する立場の違いを見てとることができる。

現在、筆者は、前者の立場から宮崎県小林市のスポーツ人口の構造を調査しているが、小林市では、1990年代始めからバレーボールやバスケットボールが衰退する一方で、高齢者の間で「ミニ・バレーボール」(＝「ソフト・バレーボール」)が急速に普及し、今では若者世代も加わって、実に市の全人口(4万人)の10%を超える市民が行政に依存せず、「ミニ・バレー」をライフ・スタイルの重要な一部として組み込んでいる実態を把握した。フィールド観察の現場において、このようなミニ・バレーの活動を観察してみると、彼らのアクティブな活動とネットワークづくりの巧みに驚くが、西欧の水準(60%以上)に近づけることを目標としている後者の立場から見ると、小林市の「10%強」という実態はきわめて貧弱かつ瑣末なものと映る。しかし一方で、今日、「サッカーくじ」の財政的な支援を受けるための基準「10%」を超える自治体がきわめて少ないこともまた事実などである。

社会学的には、「総合型地域スポーツクラブ」の実験が成功するには、地域の中に新たなスポーツ・ネットの構築を可能にする社会的ネットワークが既に存在する必要があると考えるが、成功例よりも失敗例の方が多いたことを顧みると、現実には、そうした社会的ネットワークが大部分の地域の中に存在していないと考えるべきではないだろうか。

後者の立場に立つ限り、日本のスポーツの現実はいつまで経っても「行政主導から住民主導」へ移行しない「遅れたもの」でしかないだろう。しかし、スポーツへの経済投資にムダ(「埃をかぶったピアノ」)を出さないためにも、前者の立場から、スポーツ人口の目標値を「約20%」と定めることの方がむしろ現実的かつ適正であると言えるのではないだろうか。この乖離をどのように解釈するかは、われわれの体育・スポーツへのパースペクティブを決めるのみならず、我が国のスポーツ政策の方向の決定においても重要な意味を持っているものと考えられる。

IV. 結語

このシンポジウムでは、われわれの教育研究にも深く関わっている、スポーツをめぐる「健康」言説とその背後を貫く思想、さらには現代の若者世代がスポーツの持続に当たって解決すべき発達課題とネットワークの形成を主に問題を提起してきた。これらの事柄を「魅力ある授業づくり」における行為のレリバンスとして、すなわち具体的なプログラムを提示する形で報

告できればよかったのだが、演者の力量不足から単なる問題の列挙に終始し、結局は「埃をかぶったピアノ」の域を出なかった。フロアからの助言をお願いしたい。

参考文献

根上 優「『魅力ある授業づくり』のための予備的考察」『体育・スポーツ教育研究』第2巻第1号，2001年，41-43。

鈴木 理「大学体育のパラダイム転換に関する一考察」『体育・スポーツ教育研究』第3巻第1号，2002年，5-12。

松永恵子「ライフステージムーブメントの実践」『体育・スポーツ教育研究』第3巻第1号，2002年，5-12。

上田 毅「健康科学実習における『ウォーキング』実習」『体育・スポーツ教育研究』第3巻第1号，2002年，5-12。

池田光穂・佐藤純一「健康文化の構築主義的理解」作業ノート [1] [2] [3] (<http://www.asahi->

[net.or.jp/bv6k-nmr/health00.html](http://www.asahi-net.or.jp/bv6k-nmr/health00.html))

厚生省「『健康日本21』ホームページ」

(http://www1.mhlw.go.jp/topics/kenko21_11/top.html)

厚生省『厚生白書』(平成9年版)1997年。

柄本三代子「身体知へ回帰する専門家システム」『社会学評論』51(4・67)430-445。

Giddens, Anthony, *The Consequences of Modernity*, Cambridge: Polity Press, 1990. (松尾精文・小幡正敏訳『近代とはいかなる時代か?』而立書房, 1993年。)

柄本三代子『健康の語られ方』青土社, 2002年。

文部省『スポーツ振興計画』1999年9月13日。

日本体育・スポーツ経営学会「日本体育スポーツ経営学会オープンセミナー資料2002 in FUKUOKA」『21世紀型生涯スポーツの豊かな発展を目指して—総合型地域スポーツクラブの創造—』2002年12月21日。

倉沢 進『コミュニティ論』(改訂版)日本放送出版会, 2002年。



わが国の大学教育の現状と授業改善

九州大学健康科学センター 橋本公雄

1. わが国の大学教育への批判

わが国の大学における教育の現状は、外国人にどのように評価されているのであろうか。「大学は学生の質を保証するという大切な役割を持っているはずだが、実際は教員たちは教育に熱心でないし、学生たちに対しても関心を持っていない。学生の方も入学試験のときの勤勉さとは比ぶべくもないほど勉強をしない。教室の雰囲気には厳しさがなく、学生の出席率も低い。大学が学生1人当たりで支出する経費は不当に低い…。日本の学生の書いたものを見ても、独創性を開発することよりも、他人の引いたレールの上を走っているように思えるのである（Vogel, 1979）」。「大学における貧弱な講義とわずかの勉強のために4年間が無駄になっているのは、これほど熱心に効率性を尊ぶ国民にとって信じ難いほどの時間の浪費である（Reischauer, 1986）」。「少し引用が長くなったが、これは日本に長く滞在し、日本人および日本の文化をよく知悉しているReischauer（1986）大使とVogel（1979）がわが国の大学教育の実態を報告したものである（天城, 1987）が、この報告に対し、誰も反論できないかもしれない。

確かに、私がアリゾナ州立大学に留学していた時代（1996-1997）に受講した講義は、いまだかつて見たことのない授業風景であり、感動と一種のカルチャーショックを受けたほどである。グループワークによる学生参加、小テストによる理解度・到達度のチェック、質疑応答による教員と学生の活発なコミュニケーションなど、授業はバラエティに富み、学生の授業への集中力は切れず、したがって居眠りをする者はいない。実に見事な授業の内容構成であり、米国人教師の授業に取り組む姿勢と教授力の高さを垣間見る思いがした。

2. エリート型の学生と大衆型の学生

高等教育機関の発展段階は、エリート型(elite higher education)、大衆型(mass higher education)、普遍型(universal access higher education)の3つに区分される。エリート型は同一年齢層の15%までが進学し、大衆型

は50%までが進学し、そして普遍型は50%以上が進学している段階である。わが国における2002年度の大学・短大の進学率は48.6%で、大衆型の段階であるが、今後18歳人口は減少し続け、入学志願者数と受け入れ側の定員数が同じとなる（文部科学省, 2002）。つまり、大学・短大進学希望者は全員入学可能な時代を迎え、高等教育機関は大衆型からさらに普遍型の段階へ移行しようとしているのである。

このように、大学がエリート時代から大衆型・普遍型となり、だれもが進学できる時代になると、学生の大学観、学生生活観、気質が変化するのは自明の理である。つまり、大学は一部の向学心に燃えた優秀な学生が入学してきた時代とは異なり、社会に出るまでのモラトリアムの期間であり、学問や真理を探究するというより、学生生活をエンジョイするというレジャーランド化してくるのである。

したがって、学生は学習意欲は低く、授業中に私語をし、内職をする。挙句の果てには居眠りをし、授業には出席はするが、聞いていない者も出て来る始末。このような現状をみて、教員は学生の質や学習意欲の低下を嘆くのは当然である。しかしその一方で、われわれ教員は現在の学生の大学観や学生生活観が異なっていることに気づき、それに対応した教育のあり方を考え、学生のための授業を展開していく必要もあるのである。

3. 大学入学生の学生生活観

平成15年4月に入学してきたK国立大学の新入生全員（有効回答数, 2,075名）を対象として、学生生活に対する意識を調べた。調査項目は、学生時代は「遊び楽しむべき」「勉学に励むべき」「バイトなどすべきでない」「課外活動で自己鍛練すべき」という4つの項目に関し、「非常にそう思う」「かなりそう思う」「ややそう思う」「そう思わない」を用いた4件法で尋ねた。

大学時代は「遊び・楽しむべき」という設問に対し、全体での肯定的回答は93.9%を占め、「非常に・かなり」という強い肯定的回答は60.0%も占めている。この回答傾向に男女差はみられなかった。

では、大学時代は「勉強に励むべき」に関してはどうか。こちらでも96.8%のほとんどの学生が肯定的回答であり、「非常に・かなり」という強い肯定的回答は59.9%を占めていた。ほぼ、「遊び・楽しむべき」と同様の回答傾向を示している。しかし、この肯定的回答の傾向は男子より女子に多かった ($\chi^2=19.805, p<.01$)。

つぎに、大学時代は「アルバイトなどすべきでない」という設問に関しては、肯定的回答は10.8%にすぎなかった。つまり、89.2%の者がアルバイトを容認している。この回答傾向は男女差がみられ、男子より女子のほうがアルバイト容認の傾向が強いようである ($\chi^2=8.709, p<.05$)。

最後に、大学時代は「課外活動などで自己鍛練すべき」という設問に関しては、肯定的意見は91.0%を占め、「非常に・かなり」という強い肯定的回答は43.9%であった。この項目に関しては、男女差はみられなかった。

以上の4項目から伺えるK国立大学の学生の学生生活観は、9割以上のほとんどの学生が、「大学時代は勉強もすべきだが、大いに遊び・楽しむべきであり、アルバイトすることも当然である。また、課外活動などで自己鍛練すべきである」と捉えているということである。しかし、これは学生の大学生活観・意識であり、現実の行動とは乖離がみられるかもしれない。たとえば、課外活動での自己鍛練は9割以上が肯定的意見であるにもかかわらず、実際には自己鍛練可能な競技スポーツの運動クラブ系に入部しているのは15%前後であり、近年は運動部離れと同好会・愛好会志向の現象さえ起きているのである。したがって、学生生活を遊び・楽しみ、アルバイトをするなどを考慮に入れると、「勉強すべき」と回答した9割の学生の何割が実際に勉強に励んでいるのであろうか。懐疑的にならざるを得ない。また、このデータは国立大学の学生のみを対象としているので、私立大学や短期大学の学生を含めると、比率は当然変化するものと思われる。

現在、各大学で教育改革や授業改善に乗り出しているのは、このような学生に対応した教育のあり方が問われている訳で、これは大学教員の責務なのである。確かに、研究が「主」で教育を「従」と考える教員もいるであろうが、大学は社会に有意な人材を排出するための人間教育機関であることをわれわれはもう一度考え、教育・学習指導に当たる必要がある。学習指導の本来の姿が、学習意欲を促すこと、教える授業から学習を支える授業であることを再認識すべきであろう。

4. 学生からみた魅力ある授業とは

学生からみた魅力ある授業とはどのような授業であろうか。原(1987)は154名の学生に魅力ある授業に関するアンケートを実施し、つぎの5つにまとめている。それは、①教授方法（授業の計画性、学生参加、学習目標の明示）、②学習指導法（学生とのコミュニケーション、自主的学習、学生への配慮）、③教師の個性（教師の態度、人格、知識）、④授業内容（興味・関心、体系づけ、学問的深み）、⑤教材・その他（資料配布、教育機器の活用）に関するものである。

筆者も学生に魅力ある授業とはどんな授業かを自由記述で書いてもらい、それらをまとめてみた（表1）。最も多い回答は、「授業内容に関する事項（54.5%）」であり、生活に役立つ（13.5%）、わかりやすい（12.5%）、興味・関心の湧く（12.0%）、そして面白い・楽しい（12.0%）授業をあげている。つぎに多いのが、「授業方法に関する事項（19.5%）」であり、この中には、授業形態（11.5%）、授業の雰囲気（4.0%）、授業の進め方（3.5%）などが含まれている。3番目に「教員に関する事項」があげられるが、板書・ノート、教員の話し方・魅力・教科書の使用の問題などであった。最後に、「単位に関する事項（11.0%）」があった。

このことから、学生は魅力ある授業として、まず授業内容をあげ、自分の生活に役立ち、面白く、分りやすく、しかも興味関心の湧く内容を挙げていることが分かる。また、授業方法に関する意見も結構あったが、これは後期授業にディスカッション授業を導入していることが影響しているものと思われる。つまり、自分の意見が反映される参加型の授業を望んでいることが

表1 学生からみた魅力ある授業

	n	%
授業内容に関する事項	109	54.5
生活に役立つ	27	13.5
わかりやすい授業	25	12.5
面白い・楽しい授業	24	12.0
興味・関心の湧く内容	24	12.0
知的欲求をそそる内容	9	4.5
授業方法に関する事項	39	19.5
授業形態	24	12.0
授業の雰囲気	8	4.0
授業の進め方	7	3.5
教員に関する事項	23	11.5
板書・ノート	7	3.5
教員の話し方	5	2.5
教員の魅力	4	2.0
教科書使用	4	2.0
授業の準備	3	1.5
単位に関する事項	22	11.0
その他	7	3.5

注)意見総数,n=200

分る。

原 (1987) の魅力ある授業の5分類と比較すると、授業内容、授業方法、教員に関するものなど類似点が伺える。しかし、「生活に役立つもの」を魅力ある授業内容として挙げているところをみると、健康・スポーツ科学科目をイメージして回答している節もある。また、単位に関することが挙げられているが、これは原 (1987) の内容にはなく、学生はできるだけ安易に単位を取れることを考えているようである。

5. 講義で学生の運動行動を変容できるか

九州大学の「健康・スポーツ科学」の講義は、実習の学習内容 (生涯にわたる積極的な健康・体力づくりのための具体的方法論) と関連づけながら、スポーツや身体運動の身体的、心理的、社会的な健康の側面におよぼす効果について展開される。本学に限らず、大学における健康科学関連の講義は、運動・スポーツと健康に関する知識の伝授とともに、日常の生活場面での身体活動の増強を促していると思われる。したがって、講義を聞いて学生の運動行動が促進されてこそ、講義の意義がある。

そこで、授業終了後に学生の運動行動がどのように変容したかを調べた。運動行動の変容を調べるために、トランスセオレティカル・モデル (Prochaska and Velicer, 1997) に用いられる行動変容のステージを用いた。これは、「週3回以上、1回20分以上の運動」に対し、無関心期、関心期、準備期、実行期、維持期の5つのステージのうちどれに相当するかを尋ねるものである (Marcus and Simkin, 1993; 岡, 2000)。その具体的ステージの調査項目は表2に示すとおりである。最

表2 運動行動変容の段階の定義

段階	定義
無関心期	わたしは現在、運動をしていない。 また、これから先(6ヵ月以内)もするつもりはない。
関心期	わたしは現在、運動をしていない。 しかし、これから先(6ヵ月以内)に始めようとは思っている。
準備期	わたしは現在、うんどうをしている。 しかし、定期的*ではない。
実行期	わたしは現在、定期的*に運動をしている。 しかし、始めてからまだ間もない(6ヵ月以内)。
維持期	わたしは現在、定期的*に運動をしている。 また、長期(6ヵ月以内)にわたって継続している。

*ここでいう定期的な運動とは、週3回以上、運動時間が1回20分以上のことを指している。

後の授業のとき、授業開始時 (回想法) と現在の行動のステージを測定した。

その結果は表3に示すとおりである。無関心期から

関心期、準備期、実行期、維持期へ上位のレベルへ移行した者は28名中21名 (75.0%)、関心期から準備期、実行期、維持期へ移行した者は29名中15名 (51.7%)、準備期から実行期、維持期へ移行した者は15名中4名 (26.7%)、そして、実行期から維持期へ移行した者は5名中3名 (60.0%) であった。維持期は、1名のみステージが下がっているが、12名中11名 (91.6%) は運動を継続していた。このように、どのステージも講義終了後は上位のステージへと変容している。

表3 行動変容のステージの変化 (頻数と変化率)

	無関心期	関心期	準備期	実行期	維持期	n	変化率
無関心期	7	15	5	1		28	75.0
関心期	3	11	13	2		29	51.7
準備期			11	4		15	26.7
実行期			1	1	3	5	60.0
維持期		1			12	13	

注)変化率は行動変容のステージが上の段階に変化した比率を表す。
枠の中のゴシックの数値は変化しなかった頻数

このことから、講義によって学生の運動行動は変容可能であるといえる。さらなる詳細な分析が必要であることは言うまでもないが、授業を改善し、魅力ある授業づくりを志しているわれわれは、同時に授業改善の効果を評価する方法を考えていく必要があるかもしれない。

まとめ

以上、わが国の大学教育の現状、学生の大学生生活観、魅力ある授業内容、そして授業効果の評価について述べてきたが、授業改善の本質は、誰のために行うのかかということである。教員の教育力・授業力の評価のためという認識もあるだろうが、そうではない。また単に知識を伝授することでもない。学生の学習意欲を高め、その学習行動を支援していくためにあり、特に健康科学の領域においては運動行動の変容を促すことにあるのではないかと考える昨今である。

文献

天城 勲 (1987) 「相互にみた日米教育の課題：日米教育協力研究報告書、第一法規出版、p.237.
 Marcus, B. H., and Simkin, L. R. (1993) The stages of exercise behavior. Journal of Sport Medicine and Physical Fitness 33: 83-88.
 文部科学省 (2003) 2002年学校基本調査速報。

- <http://shingaku.mycom.co.jp/news/dl/08News01.pdf>.
- 岡浩一郎 (2000) 行動変容のトランスセオレティカル・モデルに基づく運動・スポーツ心理学教室アドヒレンス研究の動向. 体育学研究 45: 543-561.
- Prochaska J. O. and Velicer W.F. (1997) The transtheoretical model of health behavior change, *Am. J. Health Prompt*, 12: 38-48.
- Reisehauer, Edwin(1986) "Introduction" In Benjamin Duke, *The Japanese School ; Lesson for Industrial America*. New York : Praeger. p. xviii.
- Vogel, Ezra F.(1980) *Japan as Number 1 : Lessons for America*. New York : Harper & Row, 1980. p. 162. Originally published in Cambridge by Harvard University Press, 1979.

シンポジウムを振り返る

鹿児島大学 飯 干 明

シンポジウムのテーマである「魅力ある授業づくり—教育と研究の融合化—」は、平成12年度より熊本県に移された事務局を中心に、九州地区大学体育連合の新たな3年間の方向性を示すものとして設定されたものである。今年度のシンポジウムを振り返る前に、過去の2年間のシンポジウムを簡単に紹介したい。

「魅力ある授業づくり—教育と研究の融合化—」をテーマとした12年度の春期研修会では、第1回目のシンポジウムが開かれ、宮崎大学の根上 優先生から、「魅力ある授業づくりのための予備的考察」と題して、①大学における体育が存在そのものを問われる時代にあること、②魅力ある授業づくりは価値のある授業の創出であり、そのためには体育の価値を科学的・哲学的に問うことなどの問題提起がなされた。また、九州大学の橋本公雄先生からは、授業設計には参加、共同、成就の3要素が重要であり、それらの要素を満たしうる可能性がある学生参加型のディスカッション授業を、他人数を対象とした「健康・スポーツ科学講義」において2回にわたり導入したという発表があった。ディスカッション授業の導入により、予習を行ってきた学生が倍増し、発言を良くしたり授業内容の理解を深めたりする学生も増えるなど、学生の積極的な授業参加を促し、学習意欲を高め、講義全体の評価も高まったという。これらの発表は、3年間にわたって、「魅力ある授業づくり」や「教育と研究の融合化」を考えていくうえで基調となるものであった。

翌13年度のシンポジウムでは、大学体育の実技・実習に関する授業について、パネリストとして、鈴木理先生（宮崎大学、体育科教育学）、上田 豪先生（福岡県立大学、運動生理学）、井上弘人先生（熊本学園大学、体育社会学）を招き、それぞれの専門分野の立場から展開されている興味ある授業を紹介していただいた。

そして、今回のシンポジウムでは、3年間の総括として、12年度のシンポジウムに演者をお願いした根上先生と橋本先生に、再び、お話をいただくことにした。まず、根上先生には、12年度のシンポジウムにおける問題提起や、過去3年間の九州体育連合における研

究・実践報告をふまえながら、スポーツ・運動の経験をもとにリアリティ感のある授業の構築について考える必要があるという発表をいただいた。具体的には、健康のためにスポーツを始める人は数限りなく多いが、「埃をかぶったピアノ」のように、途中で止めてしまう人が遙かに多いことから、『スポーツ・運動の持続という観点から、はたして「健康」がその目的になりうるか』ということを検討する必要があるという提言であった。

この提言をうけて考えたことは、体育のとらえ方や体育手段について、視点をかえてみる必要があるのではないかということである。すなわち、体育を文字どおり、「体を育てる」と解釈すると、スポーツや運動を継続することは、健康のみならず、心身の能力開発にも重要な役割を果たすとみられる。たとえば、病気や事故、怪我などで右手を動かせなくなったらどうするのか？従来は、右手を元通り動かせるようにしようというリハビリテーションが中心であったが、いくら訓練してもうまくいかない場合が少なくなかったそうである。そこで、使っていない左手を訓練すると、誰でも三ヶ月で文字を書いたりハシを使えるようになるという。このように、現代のリハビリテーションは、障害があっても、残っている健全な心身の機能をとことん伸ばし、それを新しい能力にまで高め、一人の自立した人間としての新しい生活の確立をめざしているそうである（上田敏、リハビリテーション、講談社）。しかし、病気や事故、怪我をしたあとで左手を使い始める訓練をするのではなく、日頃から、左手なども使い心身の機能を十分に高めておくことは、「体を育てる」体育に課せられた重要な課題の一つではなだろうか。心身の能力開発は、乳幼児から高齢者まで生涯にわたって求められるため、スポーツや運動を実施することは、生涯にわたって必要になってくると思われる。ただし、世の中には、スポーツをしたくても、病気や身体に障害があるためにできない人もいるかもしれない。また、忙しくて、スポーツを行う時間のない人もいるであろう。そのような人達のためには、体育手段をスポーツや運動に限るのではなく、姿勢を良く

したり、日常生活でこまめに動いたりすることも、体育手段の一つとして位置づけておくことが役に立つであろう。根上先生からの提言は、これからの体育のあり方を考えるうえで貴重なものであった。

2人目のシンポジストである橋本先生は、「魅力ある授業づくり—教育と研究の融合化—」の総括編として、最初に、わが国の大学教育の実態についてライシャワー大使が報告した、「教育熱心でない教員、勉強意欲がない学生など、大学における貧弱な講義とわずかな勉強のため、4年間が無駄になっているのは、効率性を尊ぶ国民にとって時間の浪費である」という言葉を紹介された。その後、①なぜ魅力ある授業づくりなのか、②魅力ある授業づくりのために、③学生からみた魅力ある授業とは、などを説明された。そして、大学における健康科学関連の講義の意義は、講義を通して学生の運動行動を促進することにあるとし、授業終了後に運動行動の変容を調査した結果を発表された。それによると、講義終了後には、無関心期のステージから関心期のステージへというように、どのステージも上位のステージへ変容していたことから、講義によって学生の行動は変容可能であるということであった。この発表は、運動を実践させるためには、講義を充実させることが重要な役割を果たすことを示唆す

る貴重なものであった。春期研修会では、講義に関する発表が少ないように思われるので、今後、この方面の発表が多くなることを期待したい。

大学の大綱化以来、多くの大学において、それまでスポーツ種目を中心に行われていた体育実技の他に、ウォーキング・ジョギングや筋力トレーニングなどの実習が取り入れられるようになった。九州体育連合の過去3年間の春期研修会では、体育実技の卓球を特別なゲーム方式で行ったり、実習でのウォーキングに俳句やマップを導入するなどの創意工夫をこらした発表があった。また、シーカヤックのような新しいスポーツ種目を取り入れたり、人間の生活・生存にとって重要とみられる、正しい姿勢による挙上に関する動きの実習なども紹介された。さらに、学生参画型の実習や授業に関する発表もみられるなど、様々な立場から、授業を魅力あるものにしようとする意欲的な取り組みがなされてきた。

このように、過去3年間のシンポジウムや授業への取り組みを振り返ってみると、魅力ある授業づくりに関して、ようやく基礎的なものができつつあるという印象をうけた。これらをもとに、理論と実践の融合化も交えながら、より魅力ある授業づくりを目指して、今後、さらに研究を進めていくことが期待される。

卓球授業の一実践

— スポーツ文化の主体的な継承のための構想力を得ることを目指して —

九州大学大学教育研究センター 秋元 忍*

1. はじめに

本稿の目的は、大学におけるスポーツ実践の現代史を、筆者が担当した卓球授業を事例として素描することである。本稿の動機となったのは、大学におけるスポーツ実践の必要性に対する疑問である。この疑問は、体育・スポーツ史研究の知見から提起される疑問、大学におけるスポーツ実習科目担当者としての経験から浮かんでくる疑問の、2つの観点から導かれたものであった。ただし本研究は理想的授業モデルの提示ではなく、その存在理由が問われる中で、いかにスポーツ実習科目が教授されたのかを記録することを目指した。

本稿では、筆者が担当した卓球授業を、以下の4つの観点から再構成することを課題とした。1) 授業目的はいかに設定されたのか、2) 授業はいかに展開されたのか、3) 受講者はいかに対応したのか、4) 受講者はこの卓球授業をいかなる実践としてイメージしたのか。最後に、大学におけるスポーツ実践の必要性という観点から、歴史的事実としてのこの実践を評価した。

本稿で事例として取り上げたのは、九州大学全学教育「健康・スポーツ科学科目Ⅱ」の1領域である「身体運動実習Ⅱ」の「卓球」である。2002年度前期に開講され、受講者数は38名（男性24名、女性14名）であった。

2. 卓球授業の再構成

「健康・スポーツ科学科目Ⅱ」の目的は、「様々な身体運動やスポーツを継続的に実施することの意義について学び、『身体運動の生活化』を図っていくこと」である。この文言は大学におけるスポーツ実践の必要性をめぐる議論の歴史の表象であろう。健康・スポーツ科学科目Ⅱの各授業は、全体の目的に適合的な、個別の目的を設定することになるが、筆者はこの授業の目的を、次のように設定した。「スポーツの歴史被拘束性を実践の中から理解し、その主体的な継承のため

の構想力を育むこと。」こうあるべきという考えは筆者の主観だが、その主観でさえ、不可避免的に歴史に規定される。このような二重の拘束性の中で、授業目的の設定は行われた。

この個別の授業目的を達成するため、授業の展開は以下のように設定された。

前半部では、近代スポーツとしての卓球を体感することを意図した。卓球の基本的な技術を習得し、競技としての卓球の技術がいかに体系化され、ルールが整備されているかを、上記のテーマごとに学ぶ。卓球、そして卓球を含む近代スポーツの歴史にも言及しながら、既知のスポーツとしての卓球が、いかなる歴史的位置にあるのかを学習できるよう促した。

後半部は、クラスを5つの班に分け、班ごとに「卓球を楽しむためのプログラムの作成」に取り組んだ。従来のスポーツのあり方にこだわらず、実際にスポーツ実践の場を創造することによって、スポーツへの主体的なかかわり方を考えていくための構想力を得ることをねらいとした。

受講者はこの授業に以下のように対応していた。

前半部：受講者にとって、スポーツの技術を体系的に習得し、同時に正式とされるルールを学んでいくという構成は、目新しいものではなかった。技術の向上に伴う喜び、ゲームの楽しさに言及した受講生は多かった。ただし、技術が体系化され、ルールが統一化されていることの意味についてまで、前半部の段階で思い至ることは少なかったようだ。卓球の歴史や、いわゆる近代スポーツの成立過程についても触れたが、前半部の実践を、スポーツの歴史被拘束性の理解へとより強く結び付けたのは、後半部の実践であった。

後半部：計5つの班に分かれた受講者は、7時間目からプログラムの作成を開始した。まず自己紹介を兼ねて、グループメンバー表を作成した。その後、班内でアイデアを出し合いながら、プログラム記入表に計画を具体化していった。5つの班のうち、3つの班が通常の卓球台の置き方を変更したゲームを提案した。2つの班は、通常の卓球のままの楽しみ方を志向し

*現所属：神戸大学発達科学部

た。いずれにせよ、「まったく初めての経験」(2年・女性)であったと述べた受講生もいたように、プログラムを作成する作業は、受け身ではなく主体的な関与を受講生に要請し、スポーツ実践の場の創造について深く考える機会を提供したと思われる。

受講生は、この授業に対して次のようなイメージを想起していた。前半に、既知のゲームとしての卓球の技術、ルールを学び、後半にはそれにとらわれることなく実践の場を創造するという試みは、これまでほとんど体験したことがないということもあり、違和感を訴える受講生もいた。しかし、その趣旨を理解した受講生には、おおむね好意的に捉えられていた。むしろ、「13回の講義も終わり、自分の卓球の技術も上がったと思います。今回の身体運動実習はスポーツを実践するまでの過程が重要だったのではないかと考えます」という感想のように、近代スポーツとしての卓球を相対化するための気づきを、この実践が導いたとイメージした受講生が多かった。「実を言えば、私はなまじ卓球のルールを知っているために、それ以外のルールを卓球と認めず、忌避していたので、このような

場を通じてそのような偏見をなくすことができたのはとても喜ばしいことだと考えています。」(2年・男性)既知のスポーツとしての卓球の実践のみでも、「初めての体験」のみでも、こうした気づきを導くことは困難であっただろう。よって、大学におけるスポーツ実践の必要性という観点から評価するなら、この試みには、スポーツ文化の主体的な継承のための構想力を育むものとしての価値を主張することができるだろう。

3. まとめにかえて

スポーツ実習科目担当者は研究者である。よって体育・スポーツ科学の知見を直接授業に反映できる機会に恵まれている。いかなる研究領域であっても、科学的な研究成果に基づく知見は、受講者のスポーツに対する理解を深化させるはずである。今日のスポーツのあり方は、決して普遍的なものではない。よってそのあり方の模索については主体的な関与が可能である。筆者は、こうした歴史学から得られた知見を、大学におけるスポーツ実践からも伝達可能であると考えている。

学生参画型授業の事例

— 授業研究の立場から —

中央大学 森 正明

はじめに

中央大学では1978年の文系4学部が多摩校地への移転を契機に、共同研究を行う研究所がつけられた。1980年には保健体育研究所が設立され、「授業研究班」は開設当初から研究活動を行ってきた。

「水泳の授業効果に関する研究」では、高田典衛や小林篤の「授業分析」を手法にして感想文やレポート分析を中心に研究を行ってきた。(別紙資料)

中央大学の体育教員は、1970年から各学部の所属教員として研究・教育を行ってきたので設置基準の見直し(以下、大綱化)の際にも全学的な体育の方針は尊重しながらも、各学部での審議を軸にしてその後の実施方法等が決定されてきた。

大綱化以後は、各学部のカリキュラム改革に連動するかたちで見直しが行われてきた結果、必修単位数、1単位時間数のカウント、講義の開設形態など各学部ごとに異なる形態をとってきた。

(例：法学部は、実技通年1単位〈2年間〉講義半期2単位、計4単位必修。経済学部、文学部、理工学部〈8学科中3学科は選択〉は、実技通年1単位、講義半期2単位、計3単位必修。商学部は、実技通年2単位必修、講義通年4単位選択。総合政策学部は、必修単位数なし。)

こうした背景の中で、今回授業研究の視点からの問題提起をさせていただいているので、他の大学に一般化できる内容であるか否かは疑問であるが、文学部の事例研究として報告した次第である。

文学部の体育を考えるとという視点

1991年の大綱化以後3単位必修で行ってきた文学部の体育(実技・講義)の概略は別紙のとおりである。とくに、この間の議論の中で運動部経験者が少なく体育嫌いがかなりいる文学部の体育への要望は、理論と実践の乖離をなくしてほしいというものであった。

こうしたことをうけて、実技もできる限り演習型(必要な理論を授業の中でとりいれ、実践を行う)の授業内容を模索してきた。(授業開講方法も含む)

移転後、昼間部に開設された「キャンプ」や「スキー」の授業では、半期間キャンプやスキーのための理論やトレーニングを実施し、4泊5日の実習を休暇中に行う形態の授業内容をはじめ導入した。(文学部、法学部)その後、他の学部も同様の形態の授業を行っている。(上記以外の種目では、テニスやゴルフも実施している)

演習型の授業の一環として、学生自らが授業のメニューを考え指導を体験する授業内容をメインテーマに設定した授業「レクリエーション・スポーツ」を5年ほど前から開講している。

ここでの問題意識は、研究所のテーマとして扱ってきた「ウォーミング・アップ研究」と同様、指導者のまねをするだけで「動き」そのものについての考察や「基礎的な動き」と「球技に必要な動き」との関連等を工夫する意識が希薄であることを気づかせ、授業場面での学生の主体的な参画をうながすということにある。

具体的な授業のながれについては別紙のとおりであるが、レクリエーション(以下、レク)の授業では特にルールの工夫(ローカル・ルールを用いる)を行い、受講者が臆せず参加でき、かつ楽しみながら実践できる「場づくり」を目標にしている。

授業で指導体験をするメニューづくりばかりでなく、授業準備、実践後の報告会、後片付け、指導後のレポートというながれで担当は構成されている。この授業では、指導体験を効果的に生かすためには授業の雰囲気づくりも重要であり、その配慮の一環に準備やかたづけが存在していること。指導を行う立場と提示されたメニューを実践する立場の双方の相互作用が大切であること等を、問題提起している。

これまで体育の時間に問題解決をはかる体験が少なかった学生には、かなりの難題のようであるが1年間でかなりのレベルに達する学生もみられる。可能ならば、最低2回の指導体験ができれば良いと考えているが履修人数の関係で実施できていない現状である。

「学生のための授業開発—今、何が問題か?—」

大学教育学会（旧一般教育学会）で、林義樹教授（武蔵大学）が、問題提起され教科目を越えた研究グループがつくられている。100人以上いる教室の授業効果の要素のひとつに受講者が名前を覚えるのが重要だという発表をされたことがある。あらゆるものが匿名性を主張する時代だからこそ、そこに集まる学生同士が知り合いの関係になる必要性を強調。授業時間の中で何回発言する機会があっても〇〇学部の〇〇です。と名のらせてから発言させている。「林先生が考えられている理想の授業はどういう授業ですか?」という質問に、「夢中になって我を忘れる状況です。」と答えられていた。

体育の授業に合い通じるものがあると感じるのは筆者だけではないと思われる。

林グループの参画授業（場づくり）〈劇づくりモデル〉にこのレク授業をあてはめてみると、メニューづくりから開始し授業の片付けまでの作業をとおして、①舞台づくり②道具づくり③場面づくりが完結しているといえる。

レク授業では、レク指導を行うだけではなく同時に授業の企画・運営も行うことになる。

実践の場である実技の時間に、指導体験や企画・運営体験を行うことは生涯にわたるスポーツへの参画に有効にはたらくものであると考えている。指導体験をとおして自分自身の自己表現の大切さや他者とのコミュニケーションの重要性等を認識し、最終的に自分自身（身体や精神）とのコミュニケーションをはかることにつながってほしいと思っている。

高校までの体育（指導要領と置きかえても良い）では、「心とからだを一体としてとらえ生涯にわたる豊かなスポーツライフの実現」とうたわれてはいるが、いまだ技術の向上や体力の向上が強調されている現状であると感じている。

しかしながら大学の体育のすべてを指導体験や演習型の授業にした方が良いという主張をしているわけではない。少なくとも選択肢のひとつにあっても良いのではないかという主張である。創意・工夫することや創造性を養う実践体験としてレク授業のような形態が、大学の体育授業のなかに存在しても良いのではないかということである。

今後の課題と展望

筆者は個人として、また研究所のグループの一員として「授業研究」に取り組んでいるが、そもそも教員

にとって「授業研究」とは必須の研究領域ではないかと思っている。個人の研究領域や学会・研究会等での最新の問題提起は教育の場である「授業」にすぐに還元すべきであり、その授業内容をどのように組み立てていくかという問題意識が重要である。授業で提示するデータやその分析方法等に「授業研究」の視点が関わっている。今後「授業研究」をどう捉えるかは、「研究・教育機関」から「教育・研究機関」になった大学全体の大きな課題であるともいえる。

「参画型授業」は、まだ取り組み始めたばかりで未完成である。今回のような機会に問題提起をし議論して頂くことでより精度があがっていくものであると考えている。できれば上級学年に「演習」として開設し、学内での指導体験が終了したら教育領域のインターンシップの一環で地域の幼稚園、小学校、中学校、高校、福祉施設等での指導体験までを授業内容に含めたいと希望している。大学の授業で体得したことを社会で試してみる機会をもつことは、大学の授業や学生の自己点検・自己評価をおこなうことにつながり、好循環をもたらす効果が期待される。こちらも今後の展望であると同時に、大きな課題でもある。

（参考文献）

1. 高田典衛「体育授業の方法」杏林書院（1977）
2. 高田典衛「体育授業の改造」杏林書院（1979）
3. 林竹二「学校に教育をとりもどすために」筑摩書房（1980）
4. 小林篤「体育の授業研究」大修館（1987）
5. 小林篤「体育の授業分析」大修館（1983）
6. 片岡徳雄他「大学授業の研究」玉川大学出版部（1989）
7. 日本私立大学連盟「大学の教育・授業の未来像」（2001）

「学生参画型授業の事例－授業研究の立場から－」

中央大学 森 正 明

1. 中央大学保健体育研究所「授業研究班」

「水泳授業の効果」(1982～1985)

「理工学部の体育授業の効果－12分走、シーズンコースについて－」(1986～1988)

「文学部の体育授業の効果－授業ルール、ウォーミングアップの指導体験－」(1990～1992)

「東洋体育授業の効果」(1998～2000)

「自己点検・自己評価、FDについて」(1996～2001)

2. 中央大学保健体育

学部縦割り方式(1970年に各学部にも全教員が分属)

大綱化以後、学部ごとに必修単位数の違いがあり、単位の時間数カウントも違う。

学部の理念にそった体育を考えてきた。

3. 文学部の体育を考えるという視点

体育、スポーツに対する興味の欠如。

文学部体育のテーマ「体育・スポーツは考える教科である」。

体育実技のクラス(1組～8組)と体育講義のクラス(1組～8組)をセットにして授業計画を立てる。

技術の向上を目指し、企画・運営能力を養う種目

(テニス、ゴルフ、キャンプ、スキーは、半期+集中4泊5日、5泊6日で実施)

大学からの新たな体験種目(東洋体育「太極拳と中国武術」、ニュースポーツ、ボクシング)指導体験および個人のトレーニングメニューを作成する種目(レクリエーションスポーツ、フィジカルエクササイズ)

「講義科目」(スポーツ社会学、スポーツ医学、健康教育、映像を通じたスポーツ)の4領域を開講し受講者150名～180名に対して2つの選択肢を与えている。

4. 「レクリエーション・スポーツ」の事例

テーマ: 「レクリエーション」を生活化したライフ・スタイルの創造

前期 (コンディショニング・ゲーム、球技のレクリエーション、ニュースポーツ等のレクを授業内容にして授業を展開している。)

授業最終週に、これまでの学生が指導したメニューを配付し後期の指導予定表を作成。

後期 具体的な指導のフロー: 指導1週間前までに各自がメニューを作成(ウォーミングアップ、中次ぎメニュー、メインメニュー)。担任および他の担当者と協議。→

当日は開始30分前に必要な用具、教場の準備を行いレク指導を行う。

レク指導後担当者が感想(ねらった事と具体的な展開がどうであったか)を述べ受講学生の感想を聞く。用具のあとかたづけをして指導を終了。→

メニュー作成から指導後の感想までを対象にして翌週までに「まとめレポート」を提出。→年度の授業最終週に学生自身の「自己点検・自己評価」を実施する。

5. 林の広義・狭義の参画（場づくり）；〈劇づくりモデル〉を参考に

- ① 舞台づくり（教場の選択，レイアウト）バレーコート，バスケコート，卓球場等。
- ② 道具づくり（メニューを考え，レク指導に必要な用具をそろえ，工夫をして使う。）
- ③ 場面づくり（授業準備〈雰囲気づくりも含む〉当日の指導，コメント，後片付け。）

6. 「学生のための授業開発—今，何が問題か—」

大学教育学会の問題提起：教科目を超えた大学授業に対する問いかけ。

林グループの問いかけを参考に自分自身の体育を再考する。

大学体育は，身体運動文化（活動を含む）を対象にした教育・研究の場である。

実践の場である「授業」そのものへ問いかける。（これまでの実施方法でいいのか。どのような力をつけさせているのか。どの程度力がついているのか等。）

体育・スポーツの領域からだけではなく，大学教育としての視点や斉藤孝の「身体論」の視点等も大いに参考にして体育の場を考える。

高校までは，心と体を一体としてとらえ生涯にわたる豊かなスポーツライフの実現とうたわれてはいるが，技術の向上や体力の向上が強調されているのが現状。

ルールの問題でも，現在のルールに至るまでの歴史（出来事も重要）があり，私たちの授業に国際ルールが合っているのか否かを問う授業内容があってもいいし，そこから新しいスポーツ（種目，あそび）が誕生してもいい。

創意・工夫することや創造性を養う実践体験がもっとあってもいいのではないかな？

7. 今後の課題と展望

「授業研究」は，大学教員共通の必修研究領域：将来は教授学，授業学の成立。事例研究が中心なので，共通項でくくる，客観化が難しい領域。

授業を公開して，データを蓄積し議論していく。

「学生参画型の意義」

院生時代に，TAとして模擬授業を担当。教員，院生を含めた討議。

教育領域のインターンシップで講義を行う。

学部生もインターンシップの一環で，近隣の学校や公共施設での指導を行う。